別記様式第19号（第32条第２項関係）

論 文 審 査 の 要 旨

報告番号	保研 第 22 号		氏 名	韓 侊熙
審査委員	主 査	窪田 正大		
	副 査	赤崎 安昭	副 査	根路銘 安仁
	副 査	牧迫 飛雄馬	副 査	大渡 昭彦

Relationship between Performance on the Mini-Mental State Examination Sub-Items and Activities of Daily Living in Patients with Alzheimer's Disease

アルツハイマー病患者におけるミニメンタルステート検査下位項目のパフォーマンスと日常生活活動の関係

アルツハイマー病（AD）患者の認知機能評価として初診時から頻繁に使用されるのはMMSEであるが、臨床ではMMSEの総合点数やカットオフ値のみ注目することが多い。また、患者や患者の介護者は、MMSEの総合点数が、日常生活活動（ADL）やケアにおいて何を意味するのかを理解することは困難である。さらに、AD患者におけるADL障害は、AD患者に持続的な影響を与え、生活の質を低下させるため早期の介入が求められるが、ADLには様々な生活活動があり、障害される生活活動も患者によって異なることが現状である。

そこで学位請求者の韓侊熙は、AD患者の Mini-Mental State Examination（MMSE）の下位項目のパフォーマンスとADLに着目し、MMSEの11個の下位項目と６種類の基本的日常生活活動（BADL）および８種類の手段的日常生活活動（IADL）との関連について詳細に調査した。

対象は718人のAD患者で、認知症疾患診療ガイドラインにより推奨されている Physical Self Maintenance Scale（PSMS）および Lawton Instrumental Activities of Daily Living Scale（L-IADL）を用いてADLの評価を行った。そして、MMSEの11個の下位項目とPSMSの６項目（排泄、食事、着替え、身繕い、移動能力、入浴）およびL-IADLの８項目（電話の使い方、買い物、食事の支度、家事、洗濯、移動・外出、服薬の管理、金銭の管理）との相関を求めた。また、有意な関連があったMMSE下位項目を独立変数とし、PSMSおよびL-IADLの各小項目（自立１点、非自立０点）を従属変数としてロジスティック回帰分析を行った。ロジスティック回帰分析の際は、オッズ比の標準化のためMMSE下位項目を減点群（０点）と満点群（１点）に分けて独立変数として投入した。

その結果、PSMSの「身繕い」と「入浴」は「物品呼称」と強い関連を示し、「着替え」と「移動能力」は「時間見当識」との強い関連がみられた。「食事」は、「読字命令」との強い関連を示し「排泄」は「記銘」との関連が強かった。L-IADLの場合、「移動・外出」は「模写」と関連が強く、「服薬の管理」は「時間見当識」との関連が強かった。「電話の使い方」、「買い物」、「食事の支度」、「家事」、「洗濯」、「金銭の管理」は「書字」との関連が強くみられた。本論文の限界でも示したように、MMSEの評価はスクリーニング検査であり、MMSE下位項目から認知機能とADLとの関連を明確に示すことは困難である指摘もあった。しかし、本論文の主な目的は、AD患者のMMSE下位項目パフォーマンスと様々なADLとの関連を明らかにすることであり、本論文から得られた知見は、AD患者のMMSE下位項目のパフォーマンスからADL状態を予測でき、家族から具体的なADL情報が得られにくい一人暮らしのAD患者においても、早期介入のため有用な情報として活用できると思われる。

審査の結果、５名の審査委員は、本論文は目的が明確で適切な方法が選択されており、また倫理的配慮も十分されていること、さらに本論文の結果は、保健学の発展にも寄与するものであり、臨床への汎用性も高いと予想されることから、博士（保健学）の学位論文としての価値を十分に有すると判定した。